チベタン・チルドレンズ・プロジェクト
2018年 運営報告書

2018 年もサポーターの皆様のあたたかいご支援を頂きまして誠にありがとうございました。
1 年間の運営についてご報告をさせて頂きます。

2018 年 決算の解説

2018 年の収支については前頁の通りです。当期収支は 174,203 円の赤字となり、2015 年より 4 年連続の赤字となりました。下記に当期決算について解説をさせて頂きます。

収支が赤字となった原因は収入の減少です。特に本年は任意の寄付の減少が大きな要因となっています。

収入の減少に関してここ数年は会費の未納が増え、任意の寄付も減少傾向にありました。特に任意の寄付は年々減少傾向にあり、昨年の決算時から危機感を覚え、その動向を分析しようと試みて来ました。創立以来、昨年まで 9 年間の任意の寄付は年平均約 115 万円です。プロジェクトのスタート以来この様に多くの任意のご寄附を頂く状況が続き、これが運営を大きく支えていました。何ら積極的な寄付の募集も広報活動もせず、知名度もない小さな組織に年平均 100 万円を超える寄付が集まること自体が不思議で、その理由はあまりにも手がかりが無くこれまで分析することが非常に困難でした。理由が分からない状況で寄付が減少している現在、どうすれば任意の寄付が回復するのか有効な手段を打ち出せないままでいます。

昨年からは寄付による不定期な収入を見込まずに運営費を賄える様、新規サポーター様の開拓が必要だと考え、対策をスタッフ間で話し合ってきました。実際にここ数年サポーター様が増えたものの、それとほぼ同じ分だけ会費の未納の後に音信不通を経て退会扱いとさせて頂く会員様がいらっしゃるのが実情であり、本年も定期収入を増やすには至りませんでした。

その他にも収入を増やす手段として、日本において補助金に応募をさせて頂きましたが、残念ながら選出されませんでした。その大きな理由としては下記の事が考えられます。中国政府はチベットに関する諸問題を「国内問題」としているため、チベットに関する海外からの発信は「内政干渉」と非難する姿勢を取っています。大きな市場である中国との関係を悪化させたくないというムードは外交やビジネスの場に溢れており、このためにどのような不利益を被るか分からない複雑なチベットへの支援はリスクが大きいと判断されているのではないかと推測しています。チベット支援は特に日本国内において、この様に補助金等の選定に選ばれにくい性格を持っていることは、これまでの経験から否めない事実だと感じています。

また TCP は子ども達の教育方針としてチベット仏教に根差した道徳教育を行っており、その一環としてお経の暗記や暗唱をさせています。それらの事が宗教的な活動として取り上げられ、補助金の交付が最終決定の場で覆った事もありました。特に日本においては社会福祉活動に宗教的な要素が少しでも感じられると選出されない傾向があります。

このような状況の中で補助金については日本以外の国においても検討しておりますが、英語によるプレゼンテーション等に、スタッフのスキルだけでは決められた期間内に対応できない状況もあり、獲得には至りませんでした。

上記の様な状況で、赤字を解消する具体策を打ち出せないままの 1 年となりました。

当期支出について施設別に見ますと、クンデ・ハウスが大きな割合を占めています。昨年はプレハブを建設しましたので支出が大きく増えましたが、基本的な運営費は 2016 年から 3 年間ほぼ同額です。物価の上昇や児童の増員がありながらも支出が同じレベルに抑えられているのは、倹約に努力した結果です。

クンデハーバルクリニックは 28,527 円の赤字です。昨年はわずかに黒字を出すことが出来ましたが本年は支出が収入を上回りました。支払いが困難と判断した約 3 割にあたる患者様に無料で診察と投薬をご提供しており、これらの体制を維持して行くためにも赤字にならない運営を着実に進めて行きたいと考えております。

ネパール現地事務所の支出 139,175 円は、税金と監査関連の支払いです。しかしこれは本来昨年支払うべき税金の請求が遅れ

た 2017 年分を支払い額で、2018 年分はまたも請求が遅れており年末までに支払いを完了しておりません。従来通りのスケジュールに請求があれば、さらに赤字が膨らんでいたことになります。

東京事務所の支出 149,448 円の約 84%はネパールに運ぶ物資の購入費用です。医薬品、雨漏り等の修理材料やシャワーヘッド等の設備関係の用具、ネパールでは手に入らない堅牢な通学用のリュックサック等です。会員様やスタッフが渡航するタイミングで、日本で購入し運搬しました。

本年は物価の上昇分(4.15%) を為替の換金率の上昇(4.75%) で相殺出来たため、物価の上昇が会計に直接影響しませんでした。しかしこれは単年の暫定的な状況であり、毎年の物価上昇は支出に大きく影響します。

IMF の発表によりますと、2018 年 10 月時点でインフレ率は前年比 4.15%となっています。2010 年から 2016 年にかけてほぼ毎年 9%を超えるインフレ率であったことを思うと、2017 年 4.45%、2018 年暫定値 4.15%という数値が低く感じられますが、2 年連続して 4%を超える数字は実際の生活者にとっては痛みを伴う数字です。子ども達の学校の授業料や家賃もインフレ率に応じたスライド制のため毎年上昇します。

クンデ・ハウスは孤児院と言う性格上、運営から収入を生み出しませんし、今後も子ども達の成長に伴って学費や学習関連の支出が増えると予想されます。高いインフレ率が続く中、長年にわたって子どもの教育に関する支出以外の経費を抑える努力をしておりますが、節約などの対策では支出を前年度水準に維持することは実際にかなり難しい状況です。少なくとも物価上昇分と同じだけ毎年の収入を増やす対策を考え実行することが急務です。

2018 年 運営の報告

1 年間の主な出来事を右にまとめました。
2018 年の運営を時系列で振り返りたいと思います。

3 月	イシ ISAK 受験
5 月	新規児童 2 名受け入れ
6 月	柔道大会入賞
9 月	イシ体験入学のため日本へ
	新規スタッフ採用
10 月	日本山妙法寺合宿
12 月	パサン転居

イシ ISAK 受験

成績が優秀で本人が希望したこともあり、イシ・パドゥンに ISAK (International School of Asia, Karuizawa) を受験させることを約 4 年前から模索し始めました。ISAK は軽井沢にある、次世代のリーダーを育成することを目的とした全寮制インターナショナルスクールです。この学校の設立理念につきましては HP にてご確認ください(https://isak.jp/jp/)。世界約 30 か国の生徒が在籍し、ダラムサラのチベット子ども村 (the Tibetan Children's Village) から来たチベット人の学生もいます。実際にスタッフが現地を見学し、学校関係者と面談した上で受験を決定したのが 2015 年です。それから受験対策をしてきました。

様々な国から集う生徒達は、長く多角的な試験をパスするだけの資質と輝きを備えており、この様にグローバルで知的な環境で過ごす青春時代は何事にも代えがたい財産になると思います。また卒業後にも、次世代のリーダーとして教育された彼らが世界中のあらゆる場面で活躍し繋がってゆくであろう未来は、イシ本人のみではなくチベット人社会にも有益ではないかと思いました。また学費は非常に高額ですが、優秀な生徒には奨学金プログラム (返済不要の全額または部分奨学金) が準備されている事も大きな魅力でした。

受験は 2 段階に分かれ、1 次選抜試験として様々な分野の課題に対するレポート制作、プレゼンテーション、スカイプによる面接が行われます。これに合格すると 2 次選抜試験として 8 月のサマーキャンプに招待され、2 週間の滞在期間中に課題やテストが行われ最終的な合格者が決まります。

2～3 月に行われた 1 次選抜でイシは補欠合格となりましたが、最終的に繰り上がる事はありませんでした。

不合格の原因について受験が終わった後で振り返ってみると、学力に関して不足はなかったと感じるのですが、面接での印象が弱かったのではないかと考えています。世界中から集まる生徒達は闊達で自己アピールが上手く、その手法も訓練され洗練されていると感じました。もともとイシは物静かで控えめな性格であり、この様な静的な資質の良さは時間を掛けないと相手には伝わりません。しかし面接においては、限られた時間の中でどれだけ情熱と能力があるかを積極的にプレゼンテーションしなければならないという点に力を入れて受験対策をするべきであったと反省しています。受験を指導するスタッフやご協力頂く先生方は日本人やチベット人で、この「自分の見せ方」については得意とする分野ではなかったため、プレゼンテーションに関して充分に指導が出来なかった事を反省しています。

合格という目標は達成できませんでしたが、それでもこの 3 年間、通常の学習に加えて受験の対策をしてきた真摯な努力は無駄にはならないと考えています。

新規児童２名受け入れ

５月に２名の孤児を新しくクンデ･ハウスに迎えました。いずれも男児で、カルマ・ツェリン（推定年齢３歳）、ノルゲ・ツェリン（推定年齢４歳）です。昨年、長年の懸案であった男女の寝室を別棟にする問題を解決するためのプレハブが完成し、これにより入居人数に余裕が出来たため２名の受け入れを決定しました。

二人共年齢が小さいためクンデ・ハウスの先輩達に大いに可愛がられ世話をされ、すぐに生活に馴染む事が出来ました。クンデ・ハウスの子どもが通うバヌバクタスクールでは、本来は年度初めにしか入学が許されないのですが、小学校入学前のプレイグループ（いわゆる保育園）に申請し許可が下りたため、早々に登校を始めました。

また大変有難い事に、２名の里親さんもすぐに決まりました。複数の方が里親待機リストでお待ち頂いておりましたので、お申し込みの早い順から里子についてご案内をさせて頂き、引き受けて下さいました。

本年は他にも３名の受け入れの打診がありましたが、内１名は年齢が大きすぎる事、他２名は２歳以下で幼児を受け入れるだけのマンパワーが不足しているため、他の施設を当たって頂く事にしました。

柔道大会入賞

６月20､21日に開催された柔道大会「第３回TRIYOG INTER SCHOOL COMPETITION」にクンデ・ハウスからタチェン、タシ、ペマが参加し、40kg 級でタチェン優勝、45kg級でタシ３位、35kg 級でペマ３位と言う好成績を得ました。インターナショナルスクールが開催するこの柔道大会は、各階級に 20 名以上の選手が出場するカトマンズでは大規模な大会です。

近年、ネパールでは日本人講師の熱心な指導もあり、柔道が人気を得ています。注目されるスポーツの大会で表彰台に上る成績を得た体験は、子ども達に大きな自信をもたらしました。またこの結果を子ども達が通うバヌバクタスクールは非常に評価して下さり、大会翌週の朝礼において全学年の生徒の前で課外活動の活躍を讃えて表彰を頂きました。今後も大会に参加できる様、練習に励みたいと思います。

この様な大きな大会で力を発揮できた要因は、PAM で柔道の指導を受けているお蔭だと考えています。クンデ･ハウスから徒歩 15 分で行ける距離にある孤児院 PAM(Prisoner's Assistance Mission) は、親が服役中などの理由で養育する事が出来ない子ども達が生活している施設で、ネパールの篤志家の寄付によって運営されています。PAM では以前から教育の一環として非常に熱心に柔道へ取り組んでおり、この道場から多くのネパール代表を排出している名門です。近年、アジアの大会で準優勝する選手も現れ、既に東京オリンピックに内定したこの選手は、本年より国の後押しで日本に留学し柔道に磨きをかけています。

これほど近くにありながら今年の初めまでPAMの存在を知らないでいたのですが、青年海外協力隊のアサミさんのご紹介により、PAM で柔道指導を担当される事になったフルヤさんとのご縁を繋いで頂きました。２月にスタッフが PAM 道場を見学をさせて頂き、道場の規律ある清々しい空気に感激を受け、以後お互いの協力関係を模索しつつ、現在はご厚意でクンデ・ハウスの子ども達を受け入れて下さっています。タシ、タチェン、チミ、ペマ、ツェテン、ラクパの男子６名が２班に分かれて毎日 4:30 ～7:00PM のお稽古に参加させて頂いています。

PAM の子ども達は柔道を通して固く結束しており、素直で礼儀正しく思いやりにあふれています。柔道に通い始めてからクンデ･ハウスの子ども達の変化は著しく、特に試合に出場させて頂く様になってからは、クンデ･ハウスとも学校とも違う環境でたくさんの注目を浴びながらたった一人で力を発揮しなければならないという厳しい場を経験する中で、普段の稽古の重要さを認識し、日々の努力の大切さを身を持って知った様子です。また子ども達は、試合の結果だけでなく礼儀や心の在り方までもが素晴らしい先輩たちの姿を「カッコいい」と感じて刺激を受けています。「カッコいい」と言う憧れは児童期の子ども達にとっては何より大きな行動の原動力になります。「カッコいい自分」という未来像を具体的に描けるようになった事で、実にイキイキと自信を持って様々な事に取り組めるようになったと感じています。

イシ体験入学のため日本へ

ISAK の選考に漏れたものの、これまで数年に渡り海外の高校に進学する事を目標にしてきたイシに対して、里親様より「自宅から通える範囲の日本の学校に進学してはどうか」と言うご提案がありました。

具体的には、2019 年春から日本の高校に進学するには日本語の能力が不足しているため、先ずは 1 年間中学 3 年生に編入して日本語を磨き、公立中学に編入の場合は 1 年後に一般受験で高校へ進学、中高一貫の私立中学編入の場合はスライド制の進学を前提としたご提案を頂きました。またこれらの学費、日本での生活費に関しては里親様がご負担下さると言う誠にありがたいお申し出でした。

イシの里親さんには創立以来 10 年に渡ってご支援を頂いており、東京で TCP の懇親会が開かれる際には遠方より飛行機で駆けつけて下さったり、現地に何度もご訪問を頂いたりしております。また多くのサポーター様をご紹介下さり、ご家族も里子をお引き受け頂くなどこれまで非常に熱心にサポートをして頂いております。

里親さんがイシと同性であるため、日本で共に生活することになった場合も送り出すスタッフ側としては安心だと考えました。

既に ISAK の 2 次試験のため日本へ渡航する準備を進めておりましたので、里親さんと調整をさせて頂き、先ずは編入候補の中学を見学させて頂くために 9 月 19 日から 10 日間の予定で来日する事にしました。

渡航には現地スタッフ加藤が同行しました。受け入れ学校側との交渉、準備は全て里親さんが整えて下さり、私立中学へ 1 日、公立中学へ 2 日、それぞれ体験入学をしました。両校ともに大変歓迎して下さり、イシも日本の学校に通いたいと希望したため、生活環境なども確認させて頂いた結果、2019 年春から日本の学校に進学するための各種手続きを進めて行く事としました。

一方、ネパールでは児童人身売買を防止する観点から、子どもに対する出国許可の審査が大変厳しくなっています。2018 年からはさらに取得条件が厳しくなり、体験入学のための短期出国許可も、途中で何度も断念しようかと思う程に大変煩雑な手続きでした。幸いたくさんの方々のご協力を得て関係各所にあらかじめ相談し、長い時間を掛けて少しずつ手続きを進め取得する事が出来ました。

しかし就学のための長期の出国許可は、親の生活拠点が日本にあって呼び寄せと言う形以外では下す事は出来ないというのが最終的な条件として提示されました。残念ながらイシの場合はこの条件はどうやっても満たすことは出来ませんので、日本への進学は断念するという結論になりました。

新規スタッフ採用

クンデ・ハウス専属の教育スタッフとして 9 月にチベット人尼僧 1 名を採用いたしました。本人の希望により会員の皆様にも実名の公表は差し控えさせて頂きますことをご了承ください。ここでは「アニ」（チベット語で尼僧の意）と表記させて頂きます。

ラサ出身のアニは幼少期から僧院で生活し教育を受けました。現在 52 歳、これまではチベット語の教師としてインド、ネパールの僧院で長らく教鞭を取っていました。幼いころから習慣化された長時間の座禅による修業の影響で近年、膝の状態が悪化し、立って講義を行う事が難しくなった為に新しい勤務先を探していたところ、既にクンデ・ハウス専属スタッフとして働いてくれているアチャの紹介でご縁を繋いで頂きました。

子ども達との相性を見極める為、実際には夏前から数か月の間、住み込みで教育係を担当して頂き、真面目な勤務態度に加えて、子ども達に良い変化が見られたので採用する運びとなりました。

長く教育に携わってきたため子ども達の扱いが非常に上手く、思春期で難しい年頃の子ども達とも円滑にコミュニケーションを図ってくれます。アニは事ある毎にチベットの文化や、自身やチベットが体験してきた苦難の歴史を、仏教者としての視点で子ども達に穏やかに語ってくれます。深い知恵に満ちたその言葉は、子ども達の心に深く沁み渡っている様子です。

日本山妙法寺合宿

2017年10月に日本山妙法寺の佐藤上人のお声掛けで、男子3名がルンビニとポカラへ1週間の修行に行かせて頂きましたが、本年も引き続き10月にタチェン、タシ、ペマ、チュイン、チミ、ツェデンの6名でカトマンズ郊外の妙法寺へ1週間修行に行かせて頂きました。今回は通常のお勤めだけでなく3日間の断食にも挑戦しました。

修行中は毎朝4時に起床、太鼓を叩きお題目を唱えながら村を回ります。その後お寺に戻り掃除、洗濯。それが終わると周辺の道づくりの手伝い。山を切り開いて新しく建設した寺院のため、道の造成はこれからやらなければならない重要な仕事です。この休む暇のないスケジュールに加え、今回は3日間の断食にも挑戦しました。断食中、口にしてよいのは水だけです。途中、空腹感から軽いめまいが起きたり、エネルギー補給をしていないために夜とても体が冷えて眠れないなど修行は辛かった様子ですが2名が3日間の断食を完遂しました。

住む家があり、食べるものがあるというこれまで当たり前だったことが、とても貴重で感謝すべき事なのだと深く心に刻まれた様子でした。この様に「自分で気付く」事が自らを律し変えて行く強い原動力になると感じています。断食の辛さからもう次は行きたくないと言うかと予想していたのですが、来年こそは完遂するという意欲を見せ、そんな子ども達の姿をとても頼もしく感じました。

パサン転居

秋休み中に突然パサン・ワンモの親族とおっしゃる方から連絡があり、パサンの姉が現在ネパールのチベット人コロニーで生活しているので会いに来ないかと言うお誘いを受けました。パサンに姉妹がいる事は把握しておりましたし、亡命時、既に小学生相当の年齢だったパサンは家族の記憶について確かで、話を詳しく聞いてみると本当に姉が何らかの手段で亡命し国境に近い場所で生活している事が分かりました。

結論から申し上げますと、姉と再会したパサンは、結婚して既に家庭を築いている姉家族との生活を希望し、クンデ・ハウスを離れる事となりました。以下にその経緯をご説明させて頂きます。

西チベットから亡命したパサンは2009年2月にダワ、カンドと共にクンデ・ハウスに入居しました。3名の出身地は、引取り以前にスタッフも同地区に行った事がありますが、辺境の地です。チベット人の中でも一般に西チベットは田舎だという認識ですが、その中でも特に3名の出身地は誰もが田舎の代表格として認識している場所です。

入居時に着ていたチュバはシラミとノミにまみれていた為、焼却処分。頭を丸刈りにして何度もシャワーを浴びさせました。シャワーを浴びること自体が初めての事だったので、子ども達は毎日の入浴に戸惑いを隠せない様子でした。

程なくチベット亡命政府の学校に通い始めますが、地方出身の彼女たちのチベット語は同じチベット人との間でも半分ほどしか聞き取れず、スタートからハンディの多い学校生活でした。また最初の学年は年齢によって振り分けられたため、基礎教育を全く受けていない子ども達は授業がよく分かりませんでした。その後、学校と交渉し調整をお願いしましたが、スタートでのつまずきはその後も大きく尾を引いたように感じています。特にパサンはカンドと同じ学年に振り分けられ、一方のカンドは元々の順応力と地頭の良さで学習環境に馴染み、すぐに良い成績を上げるようになったため、何かと学校では比較される場面があった様子で、そのような事がパサンの勉強に対する苦手意識をさらに深めたように思います。

またパサンは亡命後、低地順応があまりうまくいかず常に身体的にトラブルを抱えていました。西洋医学的にどのような病名が付くのか分かりませんが、高地で生まれ育ったチベット人が亡命後、インド等の低い土地に体が順応せず、肌トラブルを主とした諸症状に悩まされる事があります。これをTCPでは高山病の反対の位置づけで「低地病」と呼んでいます。クンデ・ハウスの子ども達の中で特にこの低地病の症状が激しく、亡命後何年もの間、症状が出続けたのがパサンでした。特に夏には体中に出来たおできが膿んで潰れて痒く、常に皮膚がただれている状態は見た目にも本当に可哀相な程でした。

この様に学習環境にも身体的にもカトマンズの暮らしに馴染まなかったパサンは「将来は田舎で暮らしたい」と言う様になりました。

学校の成績は、ネパール語を中心としていくつかの学科で補修テストを受ける状況でした。特にネパール語は日常全く使わないものなのでクンデ・ハウスの子ども達は皆苦手な科目なのですが、自分の生活に必要のないものを無理にやらされることに強い拒否感のある性格だったパサンは、他の子どもの様に適当にやって要領よく受け流すという事が出来ず、ますます勉強自体を苦手に感じていた様子です。

本年教育スタッフを採用してからはさらに、クンデ・ハウス内

での子ども達の学習環境が厳しくなりました。長く僧院で教壇に立ってきたアニは、スケジュールに関してとても厳格で言い訳は許されません。もともと学ぶことに抵抗が無い子ども達は促されるままに勉強し、その興味を伸ばして行きますが、勉強が苦手なパサンにとってこの新しい環境は非常に苦痛だった様子で「勉強を強制される事は拷問の様に辛い」と言う様になりました。

その様な時に実姉からの誘いを受け、スタッフと親族で話し合った結果、気分転換のためにもしばらく姉の家に行ってみる事になりました。姉はすでに結婚して家庭があり、姉の赤ん坊を子守りする日々はパサンにとってとても心地よいものだった様子です。

あまり長い期間になると学校の欠席が増える為、一度クンデ・ハウスに戻るように言いましたが、パサンの希望はこのままコロニーで姉や親族と暮らしたいというものでした。現在、8 年生のパサンにせめてもあと 3 ヶ月学校に通って中学卒業の資格を得てはどうかと説得してみましたが本人の希望は変わらず、特に学校に通う事に関して強い拒否感が感じられました。

スタッフから里親さんに経緯を話し、2018 年末をもってパサンはクンデ・ハウスを離れる事になりました。10 年と言う月日を共に過ごしていた為に正直なところ別れ難く、時には感情があふれてお互いに大泣きしながら話し合いを重ね、最終的には本人の意志を尊重する事としました。

子どもにとって何が最適な選択か、スタッフにも常に迷いがあります。殊にこのような学業の途中で子どもを送り出すことについては逡巡しました。何度も話し合った末の結論でさえ、それが最良のものであったか日に何度も思い返してはスタッフ同士で「最良だったのだ」と確かめ合わないと自信を失う程です。今後も特に子ども達の進路については真剣に悩むがゆえに迷う事も多いと思われますが、その度ごとに真摯に向き合って、その時点での最良を選んでゆきたいと思います。クンデ・ハウスで過ごした 10 年の経験が、今後のパサンの人生によい影響を与えてくれるようにと祈っています。

その他のご報告

ここでは、この1年の大きな出来事以外に、サポーターの皆様にお伝えすべき内容について、ご報告をさせて頂きます。

生活環境について

2015 年の大震災とそれに続く経済封鎖など非常に厳しい生活環境に比べると、インフレによる圧迫は相変わらずとしても、1 年を通して平穏な生活を送る事が出来ました。

酷い時には 1 日 20 時間にも及んだ停電はかなり改善していますが、計画停電が無くなった分、短い停電が頻発しています。ほとんどが 15 分程度、長くても2時間程度で解消しますが、回数が多いため生活に影響を与えています。

雨季前の 2 ～ 5 月は水不足により給水が制限され、井戸の水も汲み上げ困難なレベルに水位が下がり、何度か大型の給水車の手配をしなければならない状況が発生しました。

また 2017 年よりネパール政府は今後の経済発展に向けて、電気・上下水道などの公共サービスの供給網や道路を主とする交通網の整備に力を入れていますが、これらのインフラ整備の影響でカトマンズは随所で工事が行われ、交通渋滞が常態化しています。慢性的な工事渋滞でカトマンズ盆地は排気ガスの滞留がひどく、工事の砂塵で空気はよどみ、住人の健康にとって深刻な状況にあります。

PM2.5 は健康に良くないレベル（151 ～ 200）を超え、時にはきわめて健康に良くないレベル（201 ～ 300）や危険レベル（300 以上）の事もあり、TCP の子ども達も軽い喘息や鼻腔炎を発症、風邪をひく頻度も多くなっています。大気汚染のひどい日の外出や登校にはマスクをするなどの自衛策を行っていますが、微小粒子物質に対してはほとんどその影響から逃れられない状況です。

子どもの健康について

本年は初めて 2 名の子どもが入院しました。チュインが腎機能低下による検査入院のため 1 月 12 日より 1 週間、クンサンが肺炎により 4 月 6 日から 1 週間入院しました。

チュインは昨年より体調が優れない事が多く、長らく原因が突き止められないでしましたが、日本大使館の医務官にご相談し、病院をご紹介いただいたおかげで回復基調にあります。

クンサンは元々食が細く体力が無いため、風邪などもぶり返しがちですのでもう少し食べる量を増やせる工夫をしたいと試みてはいますが、生来が痩せ体質でなかなか体重の増加には至りません。

今後も健康を維持できるように食事や生活に注意を払って行きたいと思います。

クリニックの運営状況

現在、チベタン・チルドレンズ・プロジェクト（TCP）の代表を務めておりますシェラップ・ギャルツェンがアムチ（チベット伝医学医師）を務めるクンデハーバルクリニックについては2011年の運営報告書で設立の経緯をご説明させて頂きましたが、その後ご入会頂いた会員様も多くいらっしゃいますので、今一度アムチとTCPの関係について以下にお伝えしたいと思います。

アムチであるシェラップ・ギャルツェンと加藤ちあきは、TCPの前身組織であるミンドゥリンプロジェクト時代から25年にわたり親交があります。シェラップはもともとチベットでアムチであった父親の下で医学を学び活動していましたが、亡命後改めてチベット暦学医学大学を卒業しネパールで開業しました。

その過酷な体験ゆえに稀にしか過去のことを語りませんが、

亡命時も亡命後もその苦労は筆舌に尽くしがたいものでした。特に亡命後は深刻な病に罹りネパール山中のサナトリウムに隔離されました。サナトリウムというと聞こえはいいですが実際は何の治療も行われず、医師も看護師もいない死を待つための隔離施設です。若かったアムチは体力もあり、友人の助けもあって奇跡的な回復を見せ、その病を克服、この苦しい体験が元になって自己を犠牲にしてでも多くの命のために奉仕するアムチが誕生したのでした。

しかしあまりにも自己犠牲が過ぎ、お金のない人には無料で診療し薬を処方するため、自分自身の生活が困窮するという悪循環に陥っていました。優秀であるにも関わらず常に生活が成り立たない状況で、それゆえによいチベット薬の原料も手に入れられず思うような医療活動が出来ていないことを知った加藤が、TCP設立の際に声を掛けたのでした。

TCPがアムチとコラボレーションした当初の目的は、優秀なアムチが生活の不安なく治療に専念するための枠組みを提供することでした。そのためにクリニックの賃料と設備費、光熱費をTCPが負担しアムチの活動を支援しました。

すぐにアムチの活動は軌道に乗り、翌年には2500人の患者さんにクリニックをご利用頂き、うち25%に対しては無料診療を実施するに至りました。アムチの優秀さは様々な評判を呼び、これまで数回にわたって海外のチベタンコミュニティーからヘッドハンティングがありました。給与さえ支払っていないTCPに居残ってもらえるとは思えないような、どれも魅力的な条件を備えた話でした。しかしながらアムチはそれまでのTCP会員様との交流から「日本人は他の民族とは違う敬意の感覚を持っている。だから信用できるし、この先も日本人と一緒に活動したい」と待遇に恵まれたオファーを断り続けています。

ここ数年、毎月約150名の患者様がお見えになり、ご利用者様は一定数に落ち着きつつあります。設立当初、受診されるのはチベット人のみでしたが、アムチの腕の良さが口コミで広がり、現在の利用状況はネパール人とチベット人が半々です。チベット医学がチベット人だけの特殊なものではなく万人に効果があるのだということが少しずつ知られるようになっている様に思います。以前は診察に来られるネパール人の方は口コミでお見えになり、経済的に非常にゆとりのある方がほとんどでしたが、最近は中間層の方々が家族や友人と集団で受診される事が増えました。この数年は全診察の約3割は経済的に支払いが困難と判断し、診察・投薬を無料でご提供させて頂いておりましたが、実際はアムチが記録しないで無料診察をしている場合も多く、実数は年々増えていると感じます。

診療もさることながらシェラップは製薬が非常に得意で、医師の仲間内でも高い評価を受けており、アメリカ、台湾、ノルウェーなどに亡命しているチベット人アムチからの要請で、チベット薬や原料を輸出する機会も増えました。子ども達は学校が休みの日にはクリニックで掃除や製薬の手伝いをしており、アムチを目指す子ども達にとっては研修の場になっています。

この10年の運営でアムチの生活は経済的に安定するようになりました。具体的に運営上のことをもう少し詳細にお話しすると、現在、診療の収益は全てアムチの収入としています。診療を無料にするかどうかの裁量は全てアムチに任せ、無料診療の場合は、診察代金と処方薬はアムチの負担となります。また薬

湯施設で使用する薬草についてはアムチが負担し、薬湯の収益を全て TCP の収入としています。しかしこの薬湯もご利用される方の多くは、寒いお堂で長時間座位のまま修行をされて膝や脚に痛みを抱えておられるチベット人僧侶のため、アムチは無料でご提供しています。

アムチは良く「自分より困っているなら助けるべき」と言いますが、このような内なるアムチの判断基準によってアムチが会計報告する数よりもさらに多くの方々に実際は無料診療をご提供しており、なかなか診療所の収益が上がらないでいる事についてご理解を頂きたいと思っております。

TCP とアムチは上記のようにお互いを尊敬し信頼した上に成り立った関係を保っており、このため TCP から給与は支払っておりません。アムチは信念とプライドがあるために給与は絶対に受け取らないため、診察料に関しては現状では全てアムチの収入としております事を合わせてご理解頂きたいと思います。

またクリニックだけでなく、クンデ・ハウスの子ども達に対してもこれまでチベット語やお経の指導を請け負い、精神的にも父親的な存在です。

TCP の名称について

TCP は 2012 年 10 月、ネパールにおいて NGO としての運営許可を得て登録を行いました。この際、サポーターの皆様には TCP の正式名称についてご報告をさせて頂いているのですが今一度、確認の意味を含めて NGO としての名称についてご案内をさせて頂きます。

2009 年に「Tibetan Children's Project」として活動を始めましたが、ネパールにおいてプロジェクト名は登録上「Twinkle Children's Program」となっております。これは登録した当時、ネパールでは「チベット」と名前を冠したもの、それに類するものに対して NGO の認可を下ろすことが出来ないとの指導によるものです。また運営実態が、プロジェクト（Project）というにはあまりにも小規模であるとの指摘を受け、こちらはプログラム（Program）に改めるようにとの指導を合せて受けました。NGO としての認可はプロジェクトの安定した運営のために必須と考え、認可を受ける事を最優先に考え、全ての指導に従う事にしました。しかしこれはあくまでも登録上の仮の名前との位置づけで、

その後もプロジェクト自体は「Tibetan Children's Project」と名乗って運営しております。

スタッフについて

2018 年 12 月現在、TCP はアムチであるシェラップ・ギャルツェンを代表に、現地施設ではシェラップ、加藤ちあき、ツェリン・ラモ（クンデ・ハウススタッフ）、アニ（教育スタッフ）が専属スタッフとして、また事務局として石川幸（在ベトナム）、増田あき子（在日本）の体制で運営をしております。これらのスタッフのうちツェリンとアニを除いて、TCP より給与は支給しておりません。これは各人の「TCP の仕事は一切が菩薩行」という仏教的な動機により、全て無償で活動しております。

ボランティアであっても運営自体には大きな責任を自覚して仕事をしております。TCP は目の前にある問題に対して止むに止まれず行動することから始まった組織であり、スタッフは社会福祉事業に特化したスキルを持っている訳ではありませんので至らない部分も多い事と思いますが、今後もぜひ皆様のご指導を賜りたいと思っております。

なお 2019 年 3 月をもって事務局の石川と増田は TCP を退任いたします。TCP の立上げ準備から足掛け 12 年在籍した古参のスタッフが入れ替わり、新たな運営体制となります。

2018 年運営目標の達成

本年は「子ども達の教育の充実」「長期的な運営方針の再設定」の二つを重点目標に掲げて運営を行って参りました。

「子ども達の教育の充実」については、豊富な教育経験のあるチベット人を教育スタッフとして採用、クンデ・ハウス内により一層の規律ある学習環境を作る事が出来ました。「新規スタッフの採用」の中でもご紹介しましたが、アニは自身の亡命者としての経験を仏教者としての視点から子ども達に分かりやすく話してくれます。いつも子ども達の興味を惹きつける話術で知恵と理性のあるチベット人としてのモデルを示し、子ども達の人間性の形成に大きく寄与してくれています。

「長期的な運営方針の再設定」については、プロジェクトが基本的に目指す方向性に変化のない事を確認しましたが、現状に即した細部の修正について話し合いました。もっとも大きな課題は増収を目指すスキーム作りでしたが、これに関しては特段に有効と言える手段を打ち出せないままに終わりました。引き続きこの目標については来年度も取り組みたいと考えています。

2019 年 運営の指針

2019 年の運営目標は「現状の維持」とします。

「維持」と言う言葉は日本語の語感からすると、目標としてはあまりポジティブに聞こえないかもしれませんが、毎年目に見えて物価が上昇し、政治も安定せず、国としても未来に明るい材料が見出し難いネパールで難民プロジェクトを運営する時、実際には現状を維持して行く事にも非常な努力が必要です。これまではモチベーションを上げる意味でも常に前向きな目標を掲げて来ましたが、それらをほぼ着実にこなしてきた 10 年の運営実績を基礎として、新しい年はそれらを維持し、その中で効率化できる部分は積極的に改善して行きたいと考えています。

また昨年の目標の達成度の中で述べた「増収を目指すスキーム作り」については引き続き積極的に対策を考えて行きます。

2019 年の年間目標は上記の通りですが、この他に基本的な運営姿勢について今一度お伝えをさせて頂きます。

毎年の激しいインフレに加えて、2015 年の大震災とそれに続く経済封鎖の影響による国内の大混乱は、ネパールの人々の心と体をすっかり疲弊させてしまいました。その後も遅々として復興は進まず、またそれらの状況が世界の中では忘れ去られているのが現実です。国を大きく発展させるような資源も産業もなく、国内の閉塞感はますます高まっています。

この様な空気の中、基本的には外国の援助で運営を行っている TCP が地元の人々からどのように見られているのかは、常に注意を払うべき点だと考えています。難民を取り巻く環境はとてもセンシティブだからです。歴史的に見ても何かことが起こった時に、そのストレスの矛先がマイノリティーや弱い立場の人に向かう事は多々ありました。TCP の現地施設は、加藤を除けば全員がチベット亡命者です。国を逃れ、ネパールに間借りさせて頂いている身です。非常に経済が厳しい状況下で自国民以上に難民が恵まれた暮らしをしていては、周囲から不満が起こるのは当然のことです。

上記の理由から TCP は「地元並みであること」「地元の方々との良好な関係性を作る取り組み」に力を注ぎ、努力と注意を払って運営をしております。またこの姿勢は周りとの足並みをそろえる意味合い以外にも、子ども達を支援慣れした難民にしない為でもあります。

そのためサポーター様が現地施設をご訪問下さる際に、非常に細かく持ち込み物資に対して制限を掛け、リクリエーションに関しても綿密な事前打合せをお願いし、贅沢になり過ぎないようにしています。ご多忙な中、わざわざ現地施設までお運びくださるサポーター様にこのような制限を課しますことをスタッフとしましても非常に心苦しく申し訳なく感じておりますが、2019 年はこれまで以上に物資やリクリエーションに対し厳しい制限を掛けさせて頂きたいと考えています。この結論に至るまでにはスタッフ間で様々な話し合いを持ちましたが、アジアの最貧国と呼ばれる事の多いネパールで、これらの方針は全て長期的な視点で子ども達の為だとの結論に至りました。どうぞ運営方針をご理解頂き、今後もご協力をお願い致します。

ご見学のお申し込みの増加に伴い、2014 年より会員様以外のご見学を全面的にお断りする方針とさせて頂いております。引き続き 2019 年も同様の方針とさせて頂きます。

チベット難民の現状への理解の一助となればと考えて、初期には積極的に会員様以外のご見学の受け入れを行ってきました。しかしクンデ・ハウスへの物資の持ち込みなどに関して正しくご理解が頂けず、またご見学者様の意図がほとんどの場合「孤児院を訪問したという思い出づくり」であったため、子ども達への影響を考えて今後も特にクンデ・ハウスへのご訪問はお断りする方針です。

現状としてネパールと言う国自体もそこで亡命生活を送るチベット難民にも、明るい未来を予測できる要素は非常に乏しい状況ではありますが、正しい動機を活動の中心に据えてやるべき事を合理的な手段で行い、今後も堅実にプロジェクトを推進して参りたいと思います。ご支援くださる皆さんのご篤志をこれからもたくさんの喜びに替えて、分かち合いたいと願っております。

2008 年末にプレオープン、2009 年 3 月にプロジェクトとして正式にスタートを切った TCP は 2019 年 3 月 10 日に満 10 年を迎えます。この間には大震災や経済封鎖などネパールの歴史に残る大きな出来事も体験しましたが、多くの方々のご支援のお蔭で乗り越える事が出来ました。これまでの日々を思い起こし、感謝の気持ちでいっぱいです。プロジェクトを支えて下さる会員サポーターの皆様に、この場をお借りして改めて心より御礼を申し上げます。